

岡本 侑也 氏へ「贈賞にあたって」

齋藤秀雄メモリアル基金賞 選考委員
堤 剛

岡本さん、此度の「齋藤秀雄メモリアル基金賞」のご受賞本当におめでとう御座います！真に相応しい方が受賞された、という思いが強いております。初めてのエリザベート王妃国際コンクールチェロ部門で堂々第二位に入賞されましたが、全世界から注目を集め、それだけに優秀な方々が応募された中での受賞は特筆されてよいと思います。永年の岡本さんの努力、精進が実を結んだ結果だと云えますが、そのように厳しい状況の中で自分の実力を十分に発揮出来るという事は、大変な才能の持ち主であり、強い精神性と素晴らしい音楽性を身に着けたチェリストである事が実証された訳です。今後何処まで成長されて行くのかが本当に楽しみです。

現在ドイツで勉強されておられますが、私は岡本さんにとっての大きなプラスの一つは若い頃にドイツで学ばれ、ドイツ語がほぼ母国語のように身につけている事だと思っています。加えてお父様も音楽家であられ、家庭環境に恵まれた事も大きいでしょう。岡本さんが音楽をされる際全くヨーロッパ人のそのような印象を受けます。そして音楽に対するアプローチの仕方がとても自然です。数年前に霧島国際音楽祭で私のクラスで学ばれましたが、その時からチェロ演奏そのものが頭抜けていただけでなく、そこにしっかりとした筋が通っていました。加えて東京芸術大学で山崎伸子先生という名伯楽に出会われ、才能を思い切り伸ばして頂けたのも幸運な事だったと思います。勿論先生から教わったものを最大限伸ばすためには本人の不断の精進にかかっている訳です。

岡本さんの演奏はしっかりとした土台の上に組み立てられた形で聴き手に見えてくるという特性を持っています。簡単に言えば信頼がおけ、しかも精神性をも持っています。それに加えて研ぎ澄まされた感性、音そのものに対する厳しいまでの姿勢、そして決してオーバーな表現ではない素晴らしい音楽性に支えられていると言えると思います。ともすれば自己主張に走りがちな現在の傾向とはしっかりとした距離を置き、音楽芸術の本質、作曲家が意図したもの、そして時代考証にのっとったスタイルに忠実に従うべく自分を律し、あく迄もその作品のあるべき姿を追求される姿勢には、心から感服いたします。多分コンクールでの審査員の先生方もそのような点を認めて下さったのでしょう。稀有な才能を可能な限り伸ばし、将来の音楽界のリーダーになられることを期待しております。

第16回 齋藤秀雄メモリアル基金賞

「受賞の言葉」

岡本 侑也

この度は「齋藤秀雄メモリアル基金賞」を受賞させていただくことになり、ソニー音楽財団の皆様、今までお世話になりました先生方をはじめ、関係者の皆様、全ての方々に深く感謝申し上げます。

大変光栄に存じ、身が引き締まる思いであります。

私は小学校まで過ごしたドイツでチェロを始め、その後帰国し山崎伸子先生に師事しました。中学校に入学した年からミュンヘン音大に留学するまでの約7年間、先生は私に音楽の仕組みやあり方、様式観、あらゆる表現方法や奏法など、音楽の基本となるものを沢山教えてくださいました。もし山崎先生に出会えなかったら、全く違う音楽人生を辿っていたと思います。先生に心より感謝申し上げます。

現在は、ミュンヘン音楽演劇大学の大学院に在籍しておりますが、昨年秋より、山崎先生の師である齋藤先生が長年使っていたテストレーのチェロを弾く機会をいただき、齋藤先生の大きな存在を強く意識するようになりました。中途半端な表現を一切受け付けず、詰めの甘い奏法は瞬時に撥ね付けてしまう、まるで齋藤先生ご自身のような厳しさを持つ楽器で、この一年余り、音楽の考え方や、身体が脱力した状態での奏法など多くを考え直すことができました。簡単に音が出てしまうチェロを弾く時とは違い、一音一音にかかる思いが以前より少しずつ深まってきたように思います。

2017年6月に、チェロ部門が初めて開催されたエリザベート王妃国際コンクールにも齋藤先生のチェロと共に参加させていただきました。そのような中、今回の受賞のお知らせをいただき、驚きと喜びと共に大きな責任を感じております。

この名誉ある賞を糧として、今後もますます精進し、現在留学をしているヨーロッパの地で引き続き沢山のことを学び吸収していきたいと思います。そして改めて新鮮な気持ちで、自分の演奏を深め磨いていきながら、作曲家と聴き手をつなぐ演奏家としての使命を果たしていけるよう努力して参ります。

この度は本当に光栄な賞を有難うございました。

第16回 齋藤秀雄メモリアル基金賞

園田 隆一郎 氏へ「贈賞にあたって」

齋藤秀雄メモリアル基金賞 選考委員

長木誠司 東条碩夫 吉田純子

園田隆一郎さん、このたびは受賞おめでとうございます。

園田さんは、2006年のイタリアでの本格デビュー以来、一貫してイタリア・オペラの道を真摯に極められてきました。そしてここ10年の間で、イタリア・オペラの分野における第一人者として、その名を知らぬ者のないマエストロへと駆け足の成熟を遂げられました。

ロッシーニ没後150年を迎える今年は、東京と大阪での「チェネレントラ」公演を筆頭に、ますます園田さんの手腕が注目される1年になることと思います。最良のタイミングで賞を受けていただけたことを大変光栄に思います。

能力のある人ほど、若い時はオールマイティに、どんな作品にも取り組んでみたくなるものかもしれません。しかし園田さんは、かなり早い段階で、自身の深めてゆくべき道をイタリア・オペラに定められました。それは、音楽という世界への敬意と畏れを知る人だからこそできる決断であったろうと思います。

イタリア・オペラはともすると、どこか軽薄で深みがない、といった偏見の対象になりがちです。しかし近年、ジャンルイジ・ジェルメッティ氏やアルベルト・ゼッダ氏といった名匠による緻密な研究と実践が、そんなイタリア・オペラの名誉回復に大きな貢献を果たしてきたことは言うまでもありません。

そんな2人の精神を、日本の音楽家の他の誰よりも色濃く継承しているのが園田さんです。

ジェルメッティ氏のアシスタントを長く務め、2007年にはゼッダ氏がペーザロで創設した「ロッシーニ・オペラ・フェスティバル」に出演。「ランスへの旅」を躍動感たっぷりに率い、大きな注目を集めました。華やかな身ぶりで扇動するのではなく、音楽の細胞をしかるべく動かし、豊かな呼吸を生みだしてゆくイタリア・オペラの「伝統技法」を、園田さんは恐らく日本で初めてわがものにした指揮者と言って良いのではないかと思います。

そうしたイタリアでの鍛錬の成果を、園田さんはいよいよ、日本の音楽界で花咲かせる時期を迎えておられます。2015年から藤沢市民オペラの芸術監督を務めておられますが、蝶々夫人、セミラーミデ（日本初演）、トスカの3作品がとりわけ音楽的に高い評価を得て、市民オペラに新たな道を切り拓いたことは記憶に新しいところです。新国立劇場、日生劇場、藤原歌劇団公演、びわ湖ホールなど、活躍の場はすでに全国に及びます。

日本のオーケストラ界全体が世界的な高水準を携えたいま、指揮者にはオリジナリティと膨大なレパートリーが等しく求められるようになりつつあります。そんななか、器用な「何でも屋」に陥ることなく、己の立ち位置を見据え、必要な技術を磨き続けてきた園田さんは、多様性を尊ぶ時代の新たなマエストロだと言えるかもしれません。その飛躍の礎のひとつとなったのが、17歳のときからバイブルにしてきたという齋藤秀雄の「指揮法教程」だったことも、改めて最後に申し添えたいと思います。

第16回 齋藤秀雄メモリアル基金賞

「受賞の言葉」

園田 隆一郎

このたび「齋藤秀雄メモリアル基金賞」を受賞させていただくことになり、たいへん光栄に思っております。

指揮者は自分一人の力では何もできません。これまでご指導いただいた先生方や諸先輩方、一緒に音楽を作って下さる共演者の皆さま、いつも支えて下さっているスタッフの皆さまへの大きな感謝の気持ちを胸に抱きながら、名誉ある賞を謹んでお受けしたいと思います。

17歳の時、生まれて初めての指揮のレッスンで遠藤雅古先生から齋藤秀雄先生の『指揮法教程』を手渡され、指揮という不思議な世界の秘密を少しでも解き明かしたいと、来る日も来る日も夢中になって読み返しました。大学を卒業し、海外で様々な音楽的経験を重ねていく中でも、17歳の時に読み耽った齋藤先生の教えは私の礎となり、今でも色々な場面で助けていただいています。

先生の名著は私が15年以上暮らしているイタリアでも広く知られていて、指揮を勉強する若いイタリア人に「先入」や「引っかけ」などの技術について質問をされることがよくあります。そんな時に、齋藤先生の指揮法というのは国境を超える世界共通の言語なのだな、と改めて感じさせられます。

明るい舞台上ではなく暗いオーケストラピットの中にいることの多い私は、過去に受賞者の皆さんに比べて地味な存在なのではないかと思います。そんな私の活動に光を当て、このような身に余る大きな賞を与えて下さった小澤征爾先生、堤剛先生、選考委員の皆さま、ソニー音楽財団の皆さまに心からの感謝を申し上げます。

これまでは自分が必死に勉強することだけを考えてきましたが、40代にもなりましたし、今回の受賞を機に、これからはもっと広い視野を持ち、音楽がどのように社会の役に立てるのかを考えていきたいです。そして、おこがましいかも知れませんが、今回私が受賞することによって、オペラ指揮者を目指す若い方々を少しでも勇気づけることになれば、とも思っております。

19世紀イタリア・オペラの分野をもっとさらに深く掘り下げて研究していかなければ、という半ば使命のようなものも感じておりますし、これからじっくり時間をかけて取り組んでいきたい大作オペラもたくさんあります。また交響曲の分野でもこれまでの古典的なレパートリーに加えて、これからは後期ロマン派の交響曲や近現代の作品にも取り組んでいきたいです。

今後も、音楽の素晴らしさを世界中の一人でも多くの人に届けられるよう精進を重ね、古くからの伝統を大切にする「心」と、新しい物を受け入れる柔軟な「頭」を携えて、いつまでも挑戦し続ける音楽家でありたいと思っております。

このたびは本当にありがとうございました。